

桜蔭俳話会 一月句会 (第三三二回)

平成二十七年一月二十五日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

6点①	小豆粥世にも齡にも逆らはず	ツル子	富士そびゆ坂のてつぺん寒日和	弘子
5点②	単線の北風吹く駅の時刻表	ツル子	初詣冷めた甘酒廻し飲む	眞壽
3点①	どの背ナも語部たらむ日向ぼこ	才美	晴るる日の仏正月街静か	邦子
3点①	薄氷や消え入りさうな昼の月	弘子	足の怪我明日の一步や去年今年	幸
3点①	山間の長寿の里なり凧二つ	幸	野良猫の世話役代はる三日かな	明美
2点①	駐輪の列の乱れし雪の街	明美	暖冬の子報はづるる寒稽古	友子
2点①	中吉のみくじ結ぶや小正月	ツル子	誰彼の渾名なつかし童の玉	秀一
2点	あいさつの幼な眼線実千両	秀一	宝くじ凍ごえながらも夢買へり	眞壽
2点	雪催いつしか一人ひとりかな	守	読み棄ての勿体なきかな年賀状	邦子
2点	百人に百の個人史寒椿	守	好き嫌ひの多き児ごまめ頬ばりぬ	友子
2点	初夢か尾の先動く眠り猫	友子	冬麗たまにはいいか一人旅	才美
2点	謹んで先輩句集読初し	邦子	何年も喪中葉書が続く友	眞壽
1点①	梯子乗バックは地上五十階	守	冬鳥の来て養鶏の声なき死	明美
1点①	北風を唄はせてゐし雑木山	才美	新年の誓ひ破れし早寝起	邦子
1点	御降りのふはりと髪を浄めけり	友子	初富士やきらめく海に舟一そう	ヤエ子
1点	悴みし手にオルゴール巻き直す	明美	振りかざす大義の懷疑鬼やらひ	守
1点	三日はや散歩開始や昼の月	友子	見せかけて雪にはならず空の色	弘子
1点	大寒や写経の小筆賜はるる	秀一	寒木瓜や焼酎壺へあるがまま	秀一
1点	友去りて空ろの心寒きびし	ヤエ子	いつからか我家に根付く恵方巻	眞壽
1点	日脚伸ぶ古りし茶の間の掛時計	弘子	(不在投句 古野明美)	
1点	古九谷の藍色深き冬座敷	幸		
1点	買初や十億円の宝くじ	ヤエ子		
1点	バス見えぬ五分遅れの雪催	ツル子		
1点	枯芝や時をたがへて猫雀	秀一		
1点	春含む二本出来すや鉢の蘭	ツル子		
1点	寒昴銃持つ手にはペン持てぬ	才美		
1点	くもり日に色出し初めしエリカかな	ヤエ子		
1点	冬銀河言葉の狂ひ尾を曳けり	幸		

「事務局からお知らせ」

○二月は、句会は休みです。

○三月の句会

・日時 三月二十二日(日)午後一時から
 ・会場 旭区民文化センター・サンハート

(二俣川駅ライフ五階)

※ せりなずな嬰の笑ひて齒の二本 才美

不意に来しなべやきうどんなら出来る 弘子

少しづつ記憶の劣化深雪晴 守

年賀状俳句添へたる友二人 眞壽

鉢に生ふ食してみたし冬草や ヤエ子

技の技若さぶつかる武道始式 幸

墓仕舞ひ相次ぐ国の冬桜 明美